

夕顔と紫のゆかりの物語

上野辰義

一、はじめに

二、夕顔の理想性

三、紫のゆかりの女性たち

四、夕顔の物語の位置

夕顔とその物語が、前後の桐壺更衣、藤壺、紫上の物語と構想的に類似、或いは関連する点を持つことは、既に指摘されている。夕顔の人物像とその物語の意味を、紫のゆかりの女性たちのそれと比較して見ていくと、光源氏十七歳の時点で、夕顔のような個性の女性が登場してきた理由がよくわかるように思う。それは、青年光源氏が、両親の手から自立していき、源氏物語一編の主人公として、それに相応しい配偶者を見出し、いく、人生の欠くことのできない成長の階段を語るものとして構想された、とみなされる。

一、はじめに

夕顔が、光源氏にとって、「藤壺とは違った男性好みの理想的女性として、忘れ得ぬ人となった」といわれたのは、吉海直人氏であった。⁽¹⁾氏は、夕顔の物語における、女に対する男の教育志向、「葵上という上の品の女性の存在、『らうたき』女性としての登場、二条院へ引き取る構想等」が、そのまま紫上の物語に内在・反映しており、それゆえ「紫上は藤壺のゆかりであるばかりか、夕顔の分身でさえあったのだ」が、これがために光源氏の「夕顔との恋は、紫のゆかりという長編を志向する物語にとって、二律背反的存在とな」り、夕顔の唐突な死が必然的に導かれて、夕顔は光源氏の心の中で一層浄化され、右引のように理想の女性となったのだといわれた。

桐壺巻から帚木三帖を経て若紫・末摘花巻あたりまでの構想の連続性、関連性については、早く村井順氏『源氏物語評論』が同型の構想・プロットという点から個々指摘し、岡一男氏『源氏物語の基礎的研究』が、和辻哲郎説以来の成立論争に關与する形で、現行巻序での成立・読解を主張する中で取り上げ、また村井彦氏が、桐壺巻末から若紫巻の紫上登場に至る過程での、帚木三帖の物語の位置を、空蟬は描かれなかった藤壺の、夕顔は紫上登場の実態の、

それぞれの「^か仮りの像^{かたち}」であると説かれたのが、一つの主要な展開といえようが、これらを含め、吉海氏のものほど、夕顔の持つ独自の理想性を、構想的に藤壺から紫上に至る理想性に対峙するものとして明確にことばで表したものは、なかなか見当たらない。

私は結果的に吉海氏と同一見解をもつものだが、ではそのような藤壺とは異なる独自の理想的な女性である夕顔を登場させて、即座に退場させていく夕顔の物語は、十七歳の光源氏にとってどのような意味を持ったのであろうか。源氏物語を光源氏の物語と見るとき、このことは大事なことであるはずだが、これまであまり詳しくは論じられていない。藤壺から紫上という紫のゆかりの筋の重要さが源氏物語一編では目立ち、また、夕顔ら中の品の女の登場する帚木三帖ではそういった光源氏の心理深くに立ち入る特徴的な文言が少なく見えるからだろうか。そのなかで、近年において日向一雅氏が、「夕顔物語は光源氏や頭中将という上の品の男たちの理解の届かない、零落した女の嘆きや悲しみを語るところに主題があつたといつてよい」とされて、空蟬や夕顔など、「そういう中の品、下の品という階層に落ちぶれた女たちとの恋をとおして、光源氏是一回り大きく豊かな人間に成長していったということなのだと思う」⁽³⁾、「光源氏にとって空蟬に拒絶され、夕顔に名のりを

してもらえなかったことは、思いも寄らないことであつたはずだが、しかし、落ちぶれた彼女たちとの恋をとおして、

彼女たちの人生の悲しみや絶望の深みに触れたのである。

それは源氏にとって貴重な経験であつた」と、積極的に捉え簡潔に述べておられるのが、今後の指針となるものである。

空蟬や夕顔との交渉を語るいわゆる帚木三帖は、十二歳で元服して貴族社会を歩み始める光源氏の姿を描いた桐壺巻末から四年の空白を置いて、十七歳の夏から秋にかけての彼女たちとの交渉と、神無月ついたちごろ立冬の日における別れとを語り、十八歳の春からの事件を語る若紫巻あるいは末摘花巻へと続いていく。このように、これらは源氏物語の年立上も他巻と重複することなく、生涯の伴侶となる紫上発見前の光源氏の青春の一時期を語る、源氏物語において明確な位置を占める巻々なのである。単に、紫のゆかり系列の上の品の物語に対して中の品の女の物語を語つたもの、という以上に、これらの女との恋、特に藤壺とは異なる理想性をもつ夕顔との物語が、光源氏の人生において持つところの意味合いが考えられてしかるべきであろう。

二、夕顔の理想性

まず、藤壺とは異なる夕顔の理想性を検討してみよう。

夕顔が光源氏にとって理想の女性である表徴は、光源氏が夕顔を二条院に迎えようと考えたことに見られる。帚木巻での雨夜の品定め以後、自分の属する上層貴族以外の階層の女性にも関心を向けるようになった光源氏は、夕顔巻頭で接触をもちはじめた夕顔に、品定めで下の下と見下された階層だが、そこから予想外の魅力ある女を見出せたらと、関心をもち、顔や素性を隠して夕顔に通つてみると、自分でも不可解なほど光源氏は彼女に深く惹きこまれてしまった。そしてその我ながらのあまりの執心に苦しんで、夕顔を二条院に迎えようと思うようになるのである。

「なほ、たれとなくて、二条の院に迎へてむ。もし聞えありて、びんなかるべき事なりとも、さるべきにこそは。我が心ながら、いとかく人にしむ事はなきを、いかなる契りにかはありけむ」
(夕顔^③)

二条院に女性を迎えようという光源氏の思ひは、これ以前の桐壺巻末に、母更衣の里である二条院を父帝の命で改修された箇所にも、「かゝるところに、思ふやうならむ人をすゑて住まばやとのみ、嘆かしうおぼしわたる」と示されていた。つまり、そこに迎え入れて光源氏とともに住む

「思ふやうならむ人」とは、光源氏の伴侶たる理想の女性ということである。実際、後に二条院に迎え入れられたのは紫上であり、彼女は、桐壺巻で「心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、たぐひなしと思ひ聞えて、『さやうならむ人をこそ見め。似る人なくもおはしけるかな』」と思われていた藤壺宮の姪で、光源氏の生涯の伴侶となった人物であつた。夕顔は迎え入れられる前に頓死してしまつたから、二条院入りは実現しなかつたが、二条東院や六条院を造営してそこに光源氏の関わつた主要な女性たちを迎え入れる以前、桐壺巻末での光源氏の思いどおりに彼が二条院に迎えようとしたのは、夕顔と紫上しかいなかった。夕顔は、紫上登場以前、光源氏にそのような重大な決意のもとで待遇されようとした女性だったのである。

しかも夕顔巻のここに、「たれとなくて」とあるのは大事である。これは女の素性もわからぬままに、と一般に解されているが、だとすると、これは夕顔の下品の品と推測されている身分も穿鑿せず無視して、ということになる。そうでなく「たれとなくて」は、次例のように（「たれとなくて」という句自体は源氏物語ではここ一例のみである）文脈的に、下層の女としての素性を世間に隠して、という解釈も可能かと思うが、

その人とななくて、あはれと思ひし人の、はかなきさま

になりたるを、阿弥陀仏に譲り聞ゆるよし、あはれ
げに書き出で給へれば、
(夕顔)

その場合でも、身分差を無視しての処遇であることは変わりない。その次の「もし聞えありて」以下は、身分違いの女を迎え入れた事による世評の悪化を念頭に置いたものだが、そうなつてもそれは運命なのだろうと考えているわけで、貴族社会の価値観を無視して、世間を敵に回しても、身分差を乗り越えての処遇を夕顔に与えようとする意識なのである。そこまでの理由は、前世での宿縁の深さが思われるほどの、夕顔への空前の執心にあるのだが、こうした光源氏の夕顔への認識を振り返ると、想起されるのが、光源氏の両親である桐壺帝と更衣の、桐壺巻頭における貴族社会を敵に回しての宮廷悲劇であらう。

桐壺帝は後見勢力もない更衣を「わが御心ながら、あながちに人目おどろくばかりおぼされ」、宮廷の身分秩序を乱して「ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひ」、その果てに更衣に先立たれて「心をさめむかたなきに、いと人わろうかたくなになりはつるも、さきの世ゆかしうなむ」と、更衣への異常な執心を自覚し、更衣との因縁の深さを思ひやっていた。光源氏においては夕顔が某院で頓死することで、そして実は夕顔が故三位中将の娘であつたことで、現実に貴族社会を敵に回す状況は回

避されたが、某院怪奇発生前の光源氏にはそれが可能態として意識されていたわけである。下の品の女を二条院に迎えるというのは、現実には召人以上の待遇ではありえないだろうが、そうであっても身分違いの女を二条院に据えて度を越えて一世源氏が寵愛するというのは醜聞以外の何ものでもないだろう。その女を二条院入りに先立ってまず某院にいざなうこととなったのは、侍女など関係者もいる女の側の心身の準備を考えたのかもしれないし、五条の陋宅の気ぜわしさにとりあえず「心安」い光源氏方の居場所を求めたからかもしれないが、それはただちに、素性を隠して通っていた光源氏の正体を女の前に開陳することにつながるはずであつたから、これにより彼の夕顔の扱いに対する重い決意が窺われるのである。このことは、夕顔が実は中の品の女であつても変らない。光源氏にとつての夕顔という身分關係をのり越えて遇しようとした一女性としての価値の重さが思われてくる。

光源氏が夕顔のどこに、それほど惹きつけられたのかというと、夕顔に通い始めて彼女を二条院に迎えようと思う彼の思いが語られるまでの間、夕顔の女性としての様子を示す箇所は一つしかない。それは自分でも不可解なほど彼女に惹かれて、そこまで執着すべき恋ではないと、自身の心を醒まそうとして認識される夕顔のさまである。

かつは、いと物ぐるほしく、さまで心とゞむべき事の様にもあらず、と、いみじく思ひさまし給ふに、人のけはひ、いとあさましくやはらかにおほどきて、もの深く重き方はおくれて、ひたぶるに若びたるものから、世をまだ知らぬにもあらず。「いとやむごとなきにはあるまじ。いづくにいとかうしもとまる心ぞ」と、返すぐおぼす。

(夕顔)

あきれるほど従順でおっとりとし、落ち着いて思慮深い点は欠けて、一途に子どもっぽいものの男女の仲を知らないわけではない、そのさまからもさほど重々しい身分ではないだろう、と思うのである。夕顔の性格については、今井源衛氏がいわれるごとく、「光源氏という若い未熟な青年の目に映じたものという観が強^⑤く、実際の夕顔は、最後まで光源氏に名のりをしない、光源氏の心を全的に信じてはいない、なかなか心底から打ち解けようとはしなかったなど、現代にいう「自我」「自主性」に通ずる性向を有していたとみられるが、ある意味ではそうした自意識は一般には誰でももっており、夕顔の場合はそれを認めたくて、そのような心的強さは夕顔の内面に隠されてしまい、対外的、対人的にはかつての夫頭中将や侍女の右近が言うように、自己を強くは主張せず、表面的には人に抗しない、結果的に弱々しくなる傾向があつたのである^⑦。

「…、まめくしく恨みたるさまも見えず。涙をもらし落としても、いと恥づかしくつゝましげにまぎらはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむは、わりなく苦しきものと思ひたりしかば、心安くて又とだえ置き侍りし程に、…」

(常木)

「物おぢをなむわりなくせさせ給ふ本性にて、いかにおぼさるゝにか」

(夕顔)

「…、こそ秋ごろ、かの右の大殿より、いと恐ろしき事の聞え、まうで来しに、ものおぢをわりなくし給ひし御心に、せむかたなくおぼしおぢて、…」

(夕顔)

「…。世の人に似ず、ものづつみをし給ひて、人に物思ふ気色を見えむを、恥づかしきものにし給ひて、つれなくのみもてなして御覽ぜられ奉り給ふめりしか」

(夕顔)

だから、頭中将の正妻四の君からの脅迫におびえて身を隠し、某院で妖物に気取られたりもしてしまうのである。一般的にはやさしく弱い性格というべきものだろう。

だが、これが光源氏にとっては貴重なものだった。光源氏は、夕顔を失った後に陥った大患からの回復後、右近から夕顔の素性と性格を聞き、右近が夕顔は仕える主人としては頼りなく見えた、というのに対して次のように語る。

「はかなびたるこそは、らうたけれ。かしこく、人になびかぬ、いと心づきなきわざなり。…、女は只やはらかに、とりはづして人にあざむかれぬべきが、さすがにものづつみし、見む人の心には従はむなむ、哀れにて、わが心のままにとりなほして見むに、なつかしくおぼゆべき」など、宣へば、「このかたの御好みに、もて離れ給はざりけりと思ひ給ふるにも、くちをししく侍るわざかな」とて泣く。

(夕顔)

その頼りないのがかわいらしい、小賢しく男に従わないのは好きになれない、女は、ものやわらかで危なっかしげでありながら慎み深く男に従順であるのがよく、それでこそ思いのままに教育のしがいがある、と。光源氏が口にしたこのことは、主人として頼りなかつたときおそろされた夕顔をもちあげ、こきおろした右近をいさめるあしらいの範囲を越えている。失われた夕顔を意識して自分の理想の女性像を述べたものとみてよい。この光源氏の発言を、彼の目に映った夕顔のイメージによるものとして、夕顔に対する誤解に基づくものとしたり、夕顔が心の中では、素性を明かさないう光源氏の態度に思い悩んでいたことを暗示したものとする見解は正しくない。なぜなら夕顔についての情報、常木巻での雨夜の品定めにおける頭中将の体験談のみならず、この発言の直前で、侍女の右近からその素性

と経歴そして性格、光源氏との関わりについての思いを聞いて、基本的に必要なものを得ており、それは光源氏自身の夕顔との体験に照らしても矛盾するものではなかったからである。この段階で光源氏は、自己の「未熟」な目に映っていた夕顔像を、夕顔の側の思いも含めて補正している。この、やさしくたよりなく慎み深く素直な、教育のしがいがある女性、という光源氏の理想像は、既に指摘されているように、雨夜の品定めにおける左馬の頭の良妻にいての発言、

たゞひたぶるに子めきて、やはらかならむ人を、とかくひきつくるひては、などか見ざらむ。心もとなくとも、直し所あるこゝちすべし。

(帚木)

を受けとめたものであるが、同じく後の若紫巻で紫上を二条院に迎えたその日、遅く起きた光源氏が紫上にいった詞、「かう心憂くなおはせそ。すゞろなる人は、かうはありなむや。女は心やはらかなるなむよき」など、今より教へ聞え給ふ。

(若紫)

に反映しているように、夕顔の物語以後も光源氏の主義となつて紫上の物語に引き継がれた重要なものである。そして、その理想を体現する夕顔を、二条院に迎えることを含め、豊饒をもたらすべき二人の愛の展開がこれからという時点で、喪失してしまった光源氏の深い思いが、その後も、

末摘花・玉葛の巻頭で、

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれしこちを、年月経れど思し忘れず、ここもかしこも、うちとけぬ限りの、気色ばみ心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりしあはれに似るものなう、恋しく思ほえ給ふ。

(末摘花)

年月隔たりぬれど、あかざりし夕顔を、つゆ忘れ給はず。心々なる人の有様どもを見給ひ重ぬるにつけても「あらましかば」と、あはれに、口惜しくのみ思し出づ

(玉葛)

と語られるように、後の物語展開の契機となつて末摘花や玉葛を登場させたごとく、光源氏にとつての夕顔の位置は、紫上や女三宮を物語上に導き出す藤壺のそれと対比しうる、源氏物語において稀有なものである。このことを我々は正当に認識する必要がある。

三、紫のゆかりの女性たち

では、夕顔の理想性は、その藤壺のもつ理想性どこが異なるかという点、藤壺は桐壺巻末で光源氏からその「御ありさまを、たぐひなしと思」われていたが、具体的な認識としては雨夜の品定め終りで光源氏に次のように思われていた。

君は、人ひとりの御ありさまを、心のうちに思ひ続け給ふ。「これに、たらず、又さしすぎたる事なく、ものし給ひけるかな」と、ありがたきにも、いとゞ胸ふたがる。

(帚木)

この「人ひとり」とは、桐壺卷末から若紫巻に至る物語の中では、藤壺しか該当する者がいないだろう。この条の直前では、控えめで奥ゆかしい女の知的風流の処置のあり方が論じられていたから、この部分はそれを受けているとも見られるが、ここが雨夜の品定め最後の部分であることを考慮すればそれ以前の結論的な言辞である、誠実で落ち着いた信頼でき、感情に節度のある女性がよいと述べられていた部分も視野に入れているとも言える。いずれにしても、藤壺は物事に過不足のない理想の存在と意識されているのである。このことは、若紫巻で藤壺と密会した時の光源氏の感慨、

いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深う恥づかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させ給はぬを、などかなのめなる事だにうちまじり給はざりけむ、と、つらうさへぞおぼさるゝ。

(若紫)

にも通じているであろう。ただ、以後の物語における藤壺評は、冷泉帝の懷妊・出産、桐壺院崩御後の政治的変動の

中で具体的な処世を藤壺も思案実行せねばならず、生身の姿を見せるようになるため、梅枝巻の筆跡評など円満なものとは言いにくいものも見られるようになるが、それでも朝顔巻の光源氏による藤壺評などは、

もて出でて、らうくじき事も見え給はざりしかど、いふかひあり、思ふさまに、はかなき事わざをもしなし給ひしはや。世にまたさばかりの類ありなむや。やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたる所の、並びなくものし給ひしを、

(朝顔)

と、それ以前の完璧性にほとんど近いものであるといつておいてよいだろう。この完璧性は主に人格的なものだが、女性的魅力としても、前引の若紫巻条に、「なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深う恥づかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させ給はぬ」とあり、賢木巻にみえる桐壺院崩御後三条の宮に退下した藤壺に光源氏將近づいた条には、

…、とのかたを見出し給へるかたはらめ、言ひ知らずなまめかしう見ゆ。…世の中を、いたうおぼし悩めるけしきに、のどかにながめ入り給へる、いみじうらうたげなり。かんざし、かしらつき、御ぐしのかかりたるさま、限りなきにほはしさなど、ただかの対の姫君に、たがふところなし。

(賢木)

とあつて、「なつかし」「(いみじう) らうたげなり」「言ひ知らずなまめかし」「限りなきにほはしき」など、やはり望むべき女性美の具足が示されている。

これに対して夕顔の方は、前引の光源氏が通いはじめた頃の、

人のけはひ、いとあさましくやはらかにおほどきて、
もの深く重き方はおくれて、ひたぶるに若びたるもの
から、世をまだ知らぬにもあらず。

(夕顔)

の他にも、八月十五夜の逢瀬に、

わがもてなしありさまは、いとあてはかにこめかしく
て、。白きあはせ、うす色のなよかなるを重ねて、
はなやかなぬ姿、いとらうたげにあえかなるこゝち
して、そこととりたててすぐれたる事もなければ、細
やかにたをくとして、ものうち言ひたるけはひ、あ
な心苦しと、たゞいとらうたく見ゆ。心ばみたるかた
を、少し添へたらば、と見給ひながら、

(夕顔)

とあるように、目立つ美質もないが、おつとりとたよりな
げで、しなやかな細身ともども、ひたすら男性の庇護本能
を刺激する可憐さの持ち主なのであり、そのため遂に「心
ばみたるかた」が望まれるものであつた。「心ばむ」は他
に、源氏物語内外では末摘花巻に「心ばみ過ぐす」の形で、

「くはや。昨日の返り事。あやしく心ばみ過ぐさる

る」とて投げ給へり。

(末摘花)

と見られるぐらいの例の少ない語で、しかも、源氏物語大
成によれば、この夕顔巻例には、「心ちばめるけ」(河内
本)、「心ちばみたるかた」(陽明本)、末摘花巻例には、
「心たちすぐさるゝ」(河内本・陽明本)、の異文がある。

「心たつ」は源氏物語に二例が拾えるが、

わざと深からで、花蝶につけたるたよりごとは、心ね
たうもてないたる、なかなか心だつやうにもあり。

(胡蝶)

「げにさることなり。いとよくおほしのたまはせたり」と、いよいよ御心だたせたまひて、まづかの弁してぞかつがつ案内伝へきこえさせたまひける。

(若菜上)

と、その氣・考へになる意を表すものの、「心ちばむ」は同じく源氏物語内外に例を見出しがたい。「ばむ」は、「気色ばむ」「情けばむ」など、その様子が外に現れ窺えるようになる動きを意味するので、「心ばむ」も「心」の内部・作用が外ににじみ出るような動きをいうのであらうと思われる。その「心」の作用の範囲は広く、具体的に何の作用と限定しにくいのが、夕顔巻例の異文「心ちばむ」との繋がりであれば、夕顔がその場で他人に見せず内に秘めている己の感情・気分あたりを指すかと思われる。それを周囲

の者に勾わすような態度を光源氏は望んでいることになる。ちなみに、末摘花巻例は同様にして、時代遅れの型にはまった末摘花の歌に対する返事を考えるのに、過度に気が張ったとでもいうのであろう。

このように藤壺が女性としての美質を人格面も含め種々過不足なく具備しているのに対し、夕顔は、男がそばにいないと駄目なように思わせる性質の女であった。だから、某院で光源氏が隠していた顔を夕顔に見せた後、夕顔にも自分にうちとけるよう求めたときも、

「……今だに名のりし給へ。いとむくつけし」と宣へど、「あまの子なれば」とて、さすがにうちとけぬさ
ま、いとあいだれたり。(夕顔)

と、我が身を卑下して光源氏の要求を拒むという、夕顔にしては強い意思を見せる際にも、「かしこく、人になびかぬ、いと心づきなきわざなり」とある光源氏の嫌う、女の男に従わない小賢しさを弱めるような、和漢朗詠集下巻「遊女」にとられる「白波の寄する渚によへ世・夜」をすぐすあまの子なれば宿も定めず」歌を引く悦美な風雅を用いて対処したために、「いとあいだれたり」という評語が出てくるのである。「あいだる」は、類聚名義抄に「墟ホシキマーニ ヨロコフ フケル コノム アイタレ」、新撰字鏡に「墟 胡故反、好也、耽也、嬾也、戯也、悦也、

保志支万々又阿佐礼和佐須」とあることからすると、好色など快楽に惹かれて耽る傾向をもつ語と思われ、そのことはこの夕顔巻例はもちろんのこと、柏木巻に柏木の様子を夕霧と比較した箇所にも、

かの君は、五六年のほどのこのかみなりしかど、なほいと若やかになまめき、あいだれてぞものしたまひし。これは、いとすぐやかにとおもおもしろく、ををしきはひして、顔のめいと若うきよなること、人にすぐれたまへる。(柏木)

と、夕霧の凜とした男らしさに対して、柏木の嬌艶なさまを示しているのとも矛盾しない。

つまり、藤壺が男に距離を感じさせる手の触れにくい女性の理想性を持つのに対して、夕顔は男の腕の中に入り込みやすい身近さをもつ、女という性を感じさせる魅力、男にとつての理想を有するということになるだろう。このように藤壺とは対極的な位置にある魅力を持つ夕顔であったから、光源氏が藤壺に心を尽す一方で、夕顔に通つてみると、

かゝるすぢは、まめ人の乱るゝ折りもあるを、いとめやすくしづめ給ひて、人のとがめ聞ゆべきふるまひは、し給はざりつるを、あやしきまで、今朝のほど、昼間のへだてもおぼつかなく、など、思ひわづらはれ給へ

ば、かつは、いと物ぐるほしく、さまで心とゞむべき
事の様にもあらず、と、いみじく思ひさまし給ふに、

(夕顔)

という具合に、光源氏の理性では制御できないようなめりこみが可能となったのだらう。この、男に性的身近さを感じさせ、男の庇護本能をくすぐる可憐さは、その死後、遺児玉葛を六条院に養女として迎え入れる際、最愛の妻紫上の前で、光源氏によって、多くの女性と関わった中で夕顔が「あはれとひたぶるにらうたき方は、また類^{たぐひ}なくなむ思ひ出でらるゝ」(玉葛)と言明されているのだから、紫上も藤壺も敵わない筋金入りのものであることが知られる。

こうした夕顔の魅力は、紫のゆかりである紫上とくらべるとどう違うのであろうか。主に第二部で見られるようになる光源氏の手から自立していくような紫上の理想性は描いておいて、夕顔と比較しうる範囲で一瞥しよう。紫上は北山で光源氏が素性を知らずに垣間見した時でさえ、「さるは、限りなう心をつくし聞ゆる人に、いとう似奉れるがまもらるゝなりけり、と思ふにも、涙ぞ落つる」(若紫)とあつたように叔母の藤壺に酷似していた。その後成長した後も、前引の賢木巻条のように、「ただかの対の姫君に、たがふところなし」と二人は似ていた。外見のみな

らず性格の円満具備という点でも、これも前引の朝顔巻条の光源氏による藤壺評「世にまたさばかりの類ありなむや、やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたる所の、並びなくものし給ひしを」に続いて、

「君こそは、さいへど紫のゆるこよなからずものし給ふめれど、すこしわづらはしき氣添ひて、かどくし
さのすゝみ給へるや苦しからむ」 (朝顔)

とあるので、当人を前にした言であるから差し引きがあるだらうが、通ずる点があつたとみられる。ただ、嫉妬しやすいのと頭が切れすぎて困ることがある、と光源氏は言っている。だが、これは雨夜の品定めにあつた妻に求められる男の操縦法で度を越さなければ美点になるものであつた。だから、藤壺の理想性を光源氏の妻として加工した、あるいは変容させたというような側面を紫上は持つが、同時に一方夕顔的な面ももつ。それは、幼さの無心さがなせる光源氏への素直で自由な、しかも性愛の匂いを奥底に漂わせた接触である。二条院に引き取られてふるえながら光源氏と同衾し、起きては顔も隠さず目線を合わせながら、「ねは見ねど哀れとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを」の歌に返しを促されて、光源氏の歌の真意を理解しているのかいないのか、「かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらむ」と応えるあやうい紫上

の樣態と、彼女の「うちそばみて書いて書い給ふ手つき、筆とり給へる様の、幼げなるも、らうたうのみ覺ゆれば、心ながらあやしと思す」（若紫 光源氏の惹かれゆく心であり、さらにまた、外部的には光源氏の外出を引き止める二条院に迎えられた女の存在を、正妻葵上方の侍女達が、

「誰ならむ。いとめざましき事にもあるかな。今までその人とも聞えず、さやうにまつはし、たはぶれなどすらむは、あてやかに心にくき人にはあらじ。内裏わたりなどにて、はかなく見給ひけむ人を、ものめかし給ひて、人やとがめむと隠し給ふなり。心なげにいはけて聞ゆるは」など、

（紅葉賀）

噂するさまが、最後の一文が紫上のだが、夕顔が死なずにいて二条院に迎え入れられた際の世間の反応を仮想させていることなどである。前章末に述べた、素直で教育しがいのある女性という点とともに、紫上には夕顔から引き継いだ理想性があるとみられる。

こうして夕顔の女としての理想性は、藤壺のそれと対峙しつつ、紫のゆかりの紫上の中に藤壺のそれともどもに流れ込んでいるといえる。

だが、この一方、夕顔は紫のゆかりのそもその源である光源氏の母桐壺更衣とも繋がっているようである。

桐壺更衣が藤壺に強固に繋がっていることは言を俟たない。更衣の没後宮中に上がった藤壺のさまは「げに御かたちありさま、あやしきまでぞおぼえ給へる」と語られていたし、没後に桐壺帝の記憶に浮かぶ更衣の「なつかしうらうたげなりし」さまは、若紫巻で藤壺に迫った光源氏の目に映った彼女の「なつかしうらうたげに、さりとてうちとけ」ぬさまに重なっていたごとくである。

しかし、前章で言及したように、下の品と推量された夕顔を、身分差を無視して二条院へ迎え、そのことにより世評の悪化を招いてもそれは運命なのだろうと考えていた光源氏は、某院で夕顔を失うことで未然態的に醜聞は隠蔽されたものの、桐壺巻頭で桐壺帝が桐壺更衣を相手に宮廷社会を敵に回して演じた悲劇において、勢力の弱い更衣を「わが御心ながら、あながちに人目おどろくばかりおぼされ」、宮廷の身分秩序を乱して「あまたさるまじき人の恨みを負ひ」、その果てに更衣を失って「いとゞ人わろうかたくなになりはつるも、さきの世ゆかしうなむ」と意識していた父桐壺帝と、重なるのである。このとき、光源氏の心には父帝の体験が再生された。身分に抗して大事な女を愛しとおそうとする自覚である。これは、若気の甘さを漂わすものの、光源氏にとっては父の後を追ひ、超えていくために必要な無意識の階梯だったのであろう。その相手が

夕顔だったのであり、彼女は状況的に母桐壺更衣に重なつた。性格や容貌は、更衣が内面外面ともに円満具足の女性と見られるので本質的には異なるタイプと判断されるが、「らうたげなり」という点は共通し、更衣の「わが身はかよわく、ものはかなきありさまにて、なか／＼なるもの思ひをぞし給ふ」という点は、夕顔の「あやしく、世の人に似ずあえかに見え給ひし」・「物はかなげに物し給ひし人」という評語と通じているから、更衣のもつ一面を拡大して性愛的な色あいを強くしたのが夕顔といえようか。

四、夕顔の物語の位置

このように、夕顔は、桐壺更衣から藤壺宮を経て紫上に至る紫のゆかりの女性たちとは、対峙的な異なる理想を體現した女性でありながら、若き日の光源氏恋愛体験において母桐壺更衣に連なる女であり、素直で男の意に沿つて教育のしやすい、あやうい性の香りをもつ点で、二条院に迎えられた当初の幼い紫上に通じていた。

この、紫のゆかりに対峙する夕顔の持つていた、おっとりとしたよりなく、男性の庇護本能を刺激するような可憐さをもつ女性とは、某院で夕顔が頓死して以後、源氏物語第一部では現れない。娘の玉葛も、例えば、彼女に下心を持つ養父光源氏の接近に困惑しつつも、実父内大臣に認知され

たい思いを漏らさず内に秘めて光源氏に「ひとへにうちとけ頼み聞え給ふ心むけなど、らうたげに若やかなり。似るとはなけれど、なほ母君のけはひに、いとよくおぼえて」と、母の性格を引き継いでいるのだが、これにすぐ続けて、「これはかどめいたる所ぞ添ひたる」とあるように、実父側の遺伝によるのか知的な才気が加わっており、異なる。この才気は、後に藤袴卷末に至つて「女の御心ばへは、この君をなむ本にすべき」と養父光源氏と実父内大臣が評定したように、「多くの懸想人に最後まで慕われつつ、また悪評を受けることなく、源氏と内大臣と両家円満に出仕しようとする玉鬘への賛美」（日本古典文学全集本頭注）をもたらすことになるもので、これあるために、母夕顔とはかなり異なるのである。ただ、第二部に至つて、この夕顔の理想性は、自我の希薄な愚かさが目立っているが女三宮に通底し、第三部では浮舟に再生していると見られ、源氏物語一編を通して紫のゆかりと並立し副次的な軸となる大事なものであった。

では、この、夕顔的な、おっとりとしたよりなく、男性の庇護本能を刺激するような可憐さをもつ女性が夕顔以後、源氏物語第一部に現れないのは、なぜなのであろうか。

その手がかりは、某院で夕顔を死なせた暁における光源氏の意識に得られる。やっと夜明けを告げる鳥の声が遠く

から聞えてきて、光源氏は、

「命をかけて、何の契りにかゝる目を見るらむ。わが心ながら、かゝるすぢにおほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先のためしとなりぬべき事はあるなめり。」

(夕顔)

と思う。ここにいう、「かゝるすぢにおほけなくあるまじき心」とは、岷江入楚に「藤壺に心かけ給ふ事の、そらおそろしきむくいかと、おぼすなり。」とあるように藤壺との事に関わるとみてよいであろう。藤壺出家・光源氏須磨退居までの「おほけなし(さ)」はすべて藤壺との事に関わっているのだから。しかし、「藤壺に心かけ給ふ事」とある藤壺への執心は、光源氏の手から夕顔が奪われねばならないような「来し方行く先のためしとなりぬべき事」をもたらず因となりうるのだらうか。その因の具体的な内容を単なる継母思慕、或いは后妃恋慕のプラトニックのレベルにとどめて想定してしまうと、それによる報いが「来し方行く先のためしとなりぬべき」逢引中の下の品とみなされる女の頓死というのは、今をときめく貴公子一世源氏のスキャンダルとしては、あまりに重過ぎるであろう。若紫巻の光源氏と藤壺の逢瀬の条には「宮もあさましかりしを思し出づるだに、世と共の御物思ひなるを、さてだにやみなむ、と深うおぼしたるに」とあつて、二人の同様の逢

瀬が若紫巻のこの場面以前にも存在したことが知られるが、その先行する逢瀬の罪の意識に報いとして呼応する可能性をもつものが、ここであると見るべきだろう。恋人を逢引の最中に頓死させてしまうほどの「かく来し方行く先のためしとなりぬべき事」の報いをもたらず因として「かゝるすぢにおほけなくあるまじき心」を想起しているのである。実際、その若紫巻に先行する二人の逢瀬の存在をうかがわせる本文を、それ以前に求めることも可能である。まずは、帚木巻の雨夜の品定めの後、紀伊守邸での侍女たちの噂話に出る「『されど、さるべきくまには、よくこそ隠れありき給ふなれ』など言ふにも、おぼす事のみ心にかゝり給へば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひもらさむを、聞きつけたらむ時、など、おぼえ給ふ」(帚木)の箇所が疑われる。また、夕顔巻で、光源氏が夕顔に通うようになる以前に、

秋にもなりぬ。人やりならず、心づくしにおぼし乱るゝ事どもありて、大殿には絶え間置きつゝ、恨めしくのみ思ひ聞え給へり。六条わたりにも、とけがたかりし御気色を、おもむけ聞え給ひてのち、ひきかへしなめならむは、いとほしかし。

(夕顔)

とある箇所も疑われる。ここでの「人やりならず、心づくしにおぼし乱るゝ事ども」が、光源氏の恋愛を指すとする

とその相手は、この文に出る大殿葵上や六条御息所、また、引用直前に言及されている空蟬・軒端萩ではなく、また夕顔に関しては現在情報収集中の段階で具体的交渉はこれかなので除かれて、他に我々が知っている女君で該当し得るのは、藤壺宮と朝顔宮の二人だけであり、その朝顔は、帚木巻や葵巻の記述によって、いまだ歌を贈答する段階であつたとまずはみられるから、藤壺が残るということになるのである。「事ども」と複数なのは他にも読者の知らない女がいるのか、あるいは重ねて藤壺に関わつてのものなのだろう。ともあれ、若紫巻以前に想定される光源氏と藤壺の逢瀬は一回のみとも限らないのだから、その出来をうかがわせる本文が、某院での夕顔の頓死以前に見出され、夕顔の頓死を藤壺との罪の報いと認識した可能性があるとすることである。

ところで、夕顔を失つたこの時の感慨「来し方行く先のためしとなりぬべき事」は、この後に「あり／＼て、をこがましき名をとるべきかな」とあるように、光源氏一代のスキヤンダルを恐れてのものなのだが、これと同じように自分自身の体験を「来し方行く先のためし」として光源氏が深く意識したことが、他に二回あつた。一つは、須磨に退いた時である。下向の挨拶に花散里を訪れた箇所、

「みじか夜の程や。かばかりの対面もまたはえしもや

と思ふこそ、事なしにて過ぐしつる年頃も悔しう、来し方行く先の例になるべき身にて、なにとなく心のどまる世なくこそありけれ」と、過ぎにし方の事ども宣ひて、

(須磨)

と、ある。だが、これは会話中のもので、この場においては緊張を伴う深い詠嘆をもたない。もう一つは、光源氏の晩年に紫上を失つた時の御法巻に見られる感慨で、夕顔を失つたこの時の感慨と響きあうものである。

いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく、
仏などのすゝめ給ひける身を、心強く過して、つひに
来し方行く先のためしあらじと覚ゆる悲しさを見つる
かな。

(御法)

ここで、光源氏は紫上を失つた体験を「来し方行く先のためしあらじと覚ゆる悲しさ」と意識し、その因を「いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく、仏などのすゝめ給ひける身を、心強く過して」愛執にとらわれ出家せずに来たことに見たのである。(紫上の葬送の準備を光源氏がする箇所には「来しかた行くきき、類なき心地し給ふ」とある。)ここにおける、光源氏の人生の全てを切り刻むような深い認識から湧き出る悲しみは、夕顔を失つた時の光源氏一代のスキヤンダルを恐れたものとは、全く質を異にするが、かたや人生を歩み始めて恋愛真つ只中

の十七歳の少年の感慨、かたや自己の人生の終結を見つめて出家と向き合う五十一歳の老人の感慨、という相違を考慮するならば、この二つの光源氏の感慨は、人生の当該時点における空前絶後の体験を経て愛執にならずに抜け出せずにいる一人の男の心の叫びとして、共通点を見出すことができるだろう。

この二つの感慨の共通性からも、夕顔と紫のゆかりの紫上との対応が指摘できるのであるが、二人の女を失った際の深刻な認識が、夕顔は青年期、紫上は晩年と区分されていることが大事である。夕顔は青年期の女、紫上は生涯の女ということである。

この相違は、兩人の理想性と連関してどのような具体的な違いをもっているのか、もう少し細かくみよう。まず、夕顔は、故三位中将の娘で、中の品の女であるのに対して、紫上は兵部卿宮の庶子である、という身分の違い。夕顔は光源氏より二歳年長であるのに対し、紫上は数歳年下という年齢関係の相違。夕顔は光源氏との交渉前に既に頭中将の通う所となり娘玉葛をもうけていたのに対し、紫上は初婚であるという、結婚歴の違い、がある。性格面では前章で見たとおり、おおまかには或る方向への特化と円満具足という違いが基本だが、夕顔は「かどく／＼しう、をかしき筋などは後れたりしか」（玉葛）と追想されるのに対し、

紫上は「少しわづらはしき氣添ひて、かどく／＼しさのすみ給へるや苦しからむ」（朝顔）と告げられるように、嫉妬心の強さ・才気・機知の有無の相違が目立つ。特に最後のこの相違は光源氏の教育と女性遍歴によって、晩年の紫上が人間として自立し光源氏をも超えるような人格を得て、生活文化的な魅力をも高めていく重要な原拠となっている。このように二人の具体的な相違を見てみても、光源氏に対する一篇のヒロインとしてはやはり紫上の方が優位な条件を与えられていると言わざるをえない。逆に夕顔はそのような生涯の伴侶的な資格は当初から賦与されず、位置付けられてもいなかったらしいことになる。

この、夕顔と紫上の理想の女性としての、物語における位置付けの相違が何に由来するかというと、思うに、その答えは光源氏という偉大な一世源氏の波乱万丈の人生に寄り添って生き、ある時は光源氏を支え、ある時は光源氏を生身の人間として冷静に距離をおいて見つめることのできるような伴侶としての役は、光源氏と同様に内面外面ともに円満具足した完璧な理想性をもつ女性でなければ耐えられなかった、男心をくすぐり上から庇護されるような夕顔の性格では耐えられなかったということであろう。夕顔の性格は、桐壺巻末で「たぐひなしと思ひ聞え」られ、帚木巻雨夜の品定め最後に「これに、たらず、又さしすぎた

る事なく、ものし給ひけるかな」と思われ、朝顔巻で「世にまたさばかりの類ありなむや」といわれた、内外に節度と調和のとれた藤壺の性格面での後継者となる紫上が登場してくる以前の、青年期のまだ一個の男として完全には自立していない光源氏の相手としてこそ相応しい。

十七歳の光源氏は、自己の属する上の品の女性たちに気の休まらない、満たされない生活を送っていた。左大臣の娘葵上は「あまりうるはしき御ありさまの、とけがたくはづかしげに思ひ静まり給」(帚木)い、無理に交渉を迫った六条御息所は「あまり心深く、見る人も苦しき御有様を、すこしとりすてばや」(夕顔)と思われる具合であった。

その背後に、我が思いのままにはなしえない藤壺宮に由来する愛の渴望と、公人たる父帝しか肉親がいらないという孤独感が存在していたことは想像にかたくない。こうした中で雨夜の品定めによって、上の品以外の女性、ことに中の品の女性に関心を抱き、伊予の介の後妻空蟬との体験を通して中の品の女性の侮れない個性的な生き様に接した。夕顔に対して、「かの、しもがしもと、人の思ひ捨てし住まひなれど、そのなかにも、思ひのほかに口惜しからぬを見つけたらば、と、めづらしく思」(夕顔)いつつ、身分を隠して接触したところ、彼女のものやわからかで従順に光源氏を受け入れ、かといって男を知らぬわけでもない未知

のあやうい性格に、孤独を抱え込んでいた十七歳の青年の心は、時の帝の子息・左大臣の嫡君という外界からも開放された、恐らくは初めての自由な心で打ち解けることが可能となるような癒される環境をそこに視たのであろう。その背後に生れてこのかた体験しえなかった、そしてそこから巣立っていくべき母の性徴を感覚したかもしれない。ここに、この時期の光源氏にとって、夕顔が理想の女性であった理由が存在する。

夕顔との体験を経ることで、光源氏が得たものには、まづ前章で述べたように、父桐壺院が母更衣とともに宮廷社会を相手に格闘した、身分制度に抗しても大事な女を愛しとおそうとした自覚の光源氏の心における再生がある。これによって光源氏は自分の生の由来を自得し、父の後を追ひ、乗り越えていく足場が出来た。次に、渡辺久寿氏が指摘されるように、夕顔を失った原因が、光源氏の「現実に戻り己れの生活空間である上流世界に回帰しようとする心」であったという認識と経験である。光源氏は下の品の女と推量した夕顔に通うために、素性も顔も隠し続けたが、夕顔の魅力に引き込まれて世評を敵に回してでも女を二条院に迎え入れようと考え、とりあえず素性を明かすことに繋がる某院に連れ出したこと自体が、それまでの現実の身分社会を逸脱して成立していた二人の愛の環境を、現実に

引き戻して破壊していく第一歩であり、それがためにその夜父桐壺帝の光源氏への心配や六条の女君の心痛を光源氏が思いやることに繋がり、そうした現実世界へ目を向けた光源氏の心の揺らぎが、某院の妖物を招き寄せて、気弱な夕顔を取り失わされることとなったのである。光源氏はこれによって、夕顔との間で得ようとした愛の交歓が現実の貴族社会では存在しないこと、排斥されるべきものであることを、二条院に彼女を迎え入れる前に知った。身分的な貴族社会の構造の重さをである。夕顔を失った時の感慨では先にみたごとく、この体験を藤壺との事の報いかと思っていた。身分秩序侵犯の重大さを夕顔を媒介として擬装体験したということだ。

さらに、そうした極限的な体験の中で、光源氏は人を愛することの何たるかを知った。夕顔を取り殺されて、光源氏はそれが貴族社会の醜聞となることを恐れ、遺体の処置と事件の隠蔽を惟光にゆだねたが、その後二条院に一人戻って来たことを、彼は悔いた。

「なごて乗り添ひて行かざりつらむ。生きかへりたらむ時、いかなることゝちせむ。『見捨てて行きあかれにけり』と、つらくや思はむ」と、心まどひのうちににも思ほすに、御胸せきあぐることゝちし給ふ。(夕顔)

よみがえった際の夕顔の気持を思いやり、見捨てて帰った

自分を悔いた。そして「浮かびたる心のすきびに、人をいたづらになしつるかごとおひぬべきが、いとからきなり」と、己のいい加減な気持をせめて、わずらいの中、「たゞ今のからを見では、またいつの世にかありしかたちをも見む」と念じて東山の庵室に出向き、生前のままに変わぬ夕顔の手を取って慟哭した。一組の男女としては、女に自分の誠意を尽くしたのである。加えて死の触穢とともに患っていた病が快気した後、右近から夕顔の素性と来歴を聞き、頭中将との関わりを含め夕顔が光源氏との交渉中に抱いていた素性隠しによる男の愛情への不安、光源氏が気づかずにいたかも知れぬ夕顔の鷹揚な態度の裏に隠し込まれていた嘆きの数々を理解し、はじめて夕顔のすべてを我がものとする機を得た。夕顔を失うことで、人を立体的に知ることができたのである。

このように、夕顔との体験によって、光源氏は自分の生の根源と人生開拓の足場を得、社会の現実の冷厳さと、人を愛する意味を体得することができた。

そして、その後の物語の進展を見るならば、光源氏が、こうした男としての、人間としての成長をなしえる機を得たから、藤壺の人格的理想性を引き継ぎ、光源氏に教育されながらも光源氏に対峙する人格として成長していく幼い藤壺の姪紫のゆかりを二条院に迎えとる光源氏の側の精神

的な準備が、可能となったのであろう。夕顔は、わが身を捨てること、紫上の登場を可能としたのである。

ここに、夕顔の理想性の独自性と従属性が見えるように思う。

注

- (1) 吉海直人「夕顔物語の構造」『日本文学論究』9、昭和五十六年十月。
- (2) 村井利彦「帯木三帖仮象論・第二稿」『山手国文論攷』3、昭和五十六年三月。
- (3) 日向一雅「帯木」三帖の主題」『源氏物語研究集成』1。
- (4) 日向一雅「源氏物語の世界」。
- (5) 源氏物語の引用は角川文庫本による。源氏物語大成により一部訂す。
- (6) 今井源衛「夕顔の性格」『平安時代の歴史と文学 文学篇』。
- (7) 夕顔巻頭で、光源氏に歌を贈り結果的に彼の気をひくことになった積極性との矛盾については、歌の性格・場・作者などの理解によつて基本的に解決されるだろう。例えば、藤井貞和氏「三輪山神話式語りの方法そのほか―夕顔の巻―」『共立女子短期大学文科紀要』22、昭和五十四年二月、原田敦子氏「夕顔の怪―未完の神婚説話―」『大阪成蹊女子短期大学紀要』34、平成九年三月、田中喜美春氏「夕顔の宿りからの返歌」『国語国文』67―5、平成十年五月）などの論が参考になる。

(8) 清水好子「源氏の女君」参照。

(9) 光源氏と夕顔の物語が、桐壺帝と更衣の物語との間に持つ類似点とその意義については、既に、小島雪子氏「夕顔との恋―光源氏の人間像に関する考察―」『文芸研究』108、昭和六十一年一月に詳述されている。

(10) 夕顔と女三宮の共通性は、作者紫式部の同僚である小少將の君を仲介させると、一段と理解がしやすくなる。式部は小少將と二人の局を一つに合せて宮仕えの日々を送り、父源時通を早くに亡くした彼女の不幸な境遇に同情を寄せるなど、小少將の君に一方ならぬ思いを抱いていたが、その小少將は、小少將の君は、そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳のさましたり。やうだいいとうつくしげに、もてなし心にくく、心ばへなども、わが心とは思ひとるかたもなきやうに物づつみをし、いと世をはぢらひ、あまり見ぐるしきまで兒めい給へり。腹きたなき人、あしざまにもてなしひつくる人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をもうしなひつべく、あえかに、わりなきところつい給へるぞ、あまりうしろめたげなる。

と、紫式部日記に描写されていて、外面は「たゞいとあてやかにをかしく、きさらぎの中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむこゝちして、鶯の羽風にも乱れぬべく、あえかに見え給ふ」(若菜下)と描かれる女三宮に、内面や処世態度は夕顔に、それぞれよく似ている。源氏物語と紫式部と小少將三者の歴史的時間的關係は、あれこれ問題になるであろうが、少なくとも作者の夕顔的女性への思い入れは認められる。

(11) 夕顔の物語と浮舟の物語との関連については論が多い。例

えば、今井源衛氏「浮舟の造型―夕顔・かぐや姫の面影をめぐって」(『文学』50―7、昭和五十七年七月)、吉井美弥子氏「浮舟物語の二方法―装置としての夕顔」(『中古文』38、昭和六十一年十一月)など。

(12) その例を示しておく。

藤壺は、「おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えまし」とおぼすに、

(紅葉賀)

「人のため、恥ぢがましき事なく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ」と宣はするにも、「けしからぬ心のおほけなさを、聞こしめしつけたらん時」と恐ろしければ、かしこまりてまかで給ひぬ。

(葵)

「ただかばかりにても、時々、いみじき憂れへをだに、はるけ侍りぬべくは、何のおほけなき心も、侍らじ」などため聞え給ふべし。

(賢木)

(13) 渡辺久寿「夕顔巻における好色性と純粋性について―矛盾点・問題点の再検討を通して―」『日本文芸論集』7、昭和五十五年三月。

〔付記〕本稿は、佛敎大学平成十六年度特別研究助成による成果の一部である。